

2024年1月28日顕現後第4主日説教

申命記 18章 15-20節

コリントの信徒への手紙一 8章 1b-13節

マルコによる福音書 1章 21-28節

2024年の1月も第4日曜日となりました。顕現後の主日として、マルコ福音書を連続して読むのは、本日と来週までです。2月11日は大斎前主日、今年2月14日が灰の水曜日です。

本日の福音書箇所は、イエス様が最初に宣教活動をされた場面です。そのイエス様の教えは驚くべきものであったと物語は告げます。「**律法学者のようではなく、権威ある者のようにお教えになった**」(マルコ 1:24)からです。また汚れた霊の追放の出来事の後、「**これは一体何事だ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聞く**」(マルコ 1:27)と目撃した人々が論じ合ったとも告げます。これら記述は、イエス様が律法学者を超えて、さらにはそれまでイスラエルにあった、様々な権威を超えている方をであることを示します。その権威には、「預言者」も含まれますが、本日の旧約日課は、その「預言者」について記しています。

本日の旧約日課の小見出しは、新共同訳では「**預言者を立てる約束**」でしたが、新しい聖書協会共同訳では「**モーセのような預言者**」となっています。この二種類の小見出しが示すとおり、この箇所は、モーセと同じような預言者を立てる約束を記していますが、預言者とは何かについても記しています。そもそも、モーセは、イスラエルの民を率いる王的な指導者でもありましたが、神様の言葉を民に伝える預言者的な要素も持っていました。祭儀を行う祭司的要素もありました。ここではその中の「**預言**」という機能が、これから専門職として立てられることが記されています。本日は「**預言**」あるいは「**預言者**」ということから学びたいと思います。

最初に預言者について、「**あなたの神、主は、あなたの中から、あなたの同胞の中から、私のような預言者をあなたのために立てられる。あなたがたは彼に聞き従わなければならない**」(申 18:15)とあります。「私」とはモーセのことですから、ここで言及されているのは、モーセのような預言者ということになります。このモーセのような預言者という表現を、どのような意味として受け取ればよいかは解釈が分かれます。但し、モーセ個人の特徴を継承したというよりも、今後は、預言者がモーセの役割の一つを担うということでしょう。

預言者の役割は、「**同胞の中から、～～立てられる**」と「**同胞の中から～～を立て**」ありますので、まずイスラエルの代表の一人です。それでは預言者の機能は何でしょうか。それは、「**その口に私の言葉を授ける。彼は私が命じるすべてのことを彼らに告げる。彼が私の名によって語る私の言葉に聞き従わない者がいれば、私はその責任を追及する。**」(申 18:18b~19)とある通り、主なる神様が告げられたことを語るということです。つまり預言者の語る言葉は、主なる神様の言葉なのです。

この時、人間である預言者が、そのような機能を担って大丈夫かという疑問が出ます。しかし、それについての言及もあります。「ただし、預言者が傲慢にも、私の命じていないことを私の名によって語ったり、他の神々の名によって語ったりするならば、その預言者は死ななければならない」(申 18 : 20)。預言者は、「傲慢」になってはならず、主なる神様から受けた言葉を謙虚に受け止め、民に語らなければならないのです。自分で勝手に語ったら死刑なのです。

次に、預言者の言葉が主なる神様から預かったものであるか否かを、どうやって識別するのかという疑問です。聖書日課では、省略されていますが、その点もしっかりと記されています。「もしあなたが心の中で、「私たちは、その言葉が主の語られた言葉ではないことを、どのように知りえようか」と考える場合、その預言者が主の名によって語っていても、その言葉が起こらず、実現しないならば、それは主が語られた言葉ではない。預言者が傲慢さのゆえに語ったもので、恐れることはない」(申 18 : 21-22)。その預言が実現するかどうか、それが判断基準なのです。

ただし、これらの判断基準は、絶対的な事柄ではありません。『聖書(旧約)』の中で一番短い預言書である「ヨナ書」が示す内容は、ヨナに託された預言の真意は、ヨナへの徹底した召命(それから逃げられない)を超えて、また預言の内容(預言したがその通りには実現しなかった)も超えて、ニネベの民の滅亡ではなく、立ち返ることを通した救いであったからです。主なる神様の真意は預言の言葉自体を超えることもあるのです。それがまた、預言活動の面白いところでもあります。

預言活動についてそのように描く「ヨナ書」は、預言者の働き、預言活動がかなり一般的になってからの文書と考えられますが、イスラエルの歴史において、サウル王をはじめとした、王国の誕生と共に、預言活動は盛んに行われるようになりました。それらが預言書としてまとめられ、律法の次に大切な文書として伝えられたのです。預言活動は、王制がある時はとくに盛んにおこなわれ、その王制に示唆を与え、あるいは批判を与える集団として機能しました。

モーセが持っていた役割には、祭儀を司る祭司としての機能もあり、それはのちに神殿の祭司たちが担い、ことにエルサレム神殿が確立したあとは、明確な組織として役割を担います。

モーセに起源をもつともいえる、これらの働きから王的機能、祭司的機能と預言者的機能という言葉が用いられます。教会においては、王的機能はあまり対象とはなりません。祭司的機能と預言者的機能は、重要です。ただし、どちらが正しいかという二者択一的な概念ではありません。またバランスが大事ということでもありません。大切なことは、伝統を習慣的に繰り返す祭司的機能を通して、預言者的に今何が大切かを見極めて具体化して、主なる神様の愛を示すことであるからです。難しい事柄ですが、簡単に言い換えれば、その愛を、もっともわかりやすい形で伝えたイエス様のことを伝えることが大切だということです。本日の使徒書でパウロが「知識は人を高ぶらせるのに対して、愛は人を造り上げます」(1 コリ 8 : 1) と語る通りであり、その愛の教えてくださったイエス様の教えは、「権威ある新しい教え」(マルコ 1 : 27) であるからです。